

我を超える

永田円了

Beyond Gold Medals

オリンピックの光と影

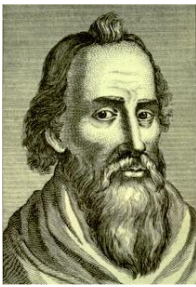
オリンピズムは、肉体と意志と知性の資質を高揚させ、均衡のとれた全人を目指す人生哲学である（オリンピック憲章）。しかし果たして現実がこの理想にどれだけ近づいているかは疑問である。

五輪に出場するために、国籍まで変えて走ろうとする人（猫ひろし）。五輪のプレッシャーで押しつぶされ自殺する人（マラソン 円谷幸吉、1972年）。金メダルを取るために薬を使う人（ドーピング多数）。金メダルを取りながら性犯罪に走るスポーツ選手たち（『スポーツ・ヒーローと性犯罪』大修館書店）



肉体と精神のバランス

健全な精神は、健全な肉体に宿る（A Sound Mind In A Sound Body）。実は、これは誤訳だった。これを言った古代ローマの詩人・ユウェリナスは、若者が体を鍛えるだけで勉強しないことを嘆き、「健全な肉体には、健全な精神も宿ってほしい」と言ったのであった。このコトバが明治時代に日本に伝えられた時、富国強兵の追い風もあり、健全な精神は、健全な肉体に宿る、と誤訳されたのであった。（産経新聞 1998年2月2日夕刊）



“我を超える”戦略

我を超えるとは、自らのエゴの支配からずっと解放されることである。各人の生まれながらの力をそのまま発揮できる意識地場が現れてくることである。

ポルトの場合：脊柱側湾症とうまく付き合いながら、そこから生まれる欠点を直すことより、自らの長所を伸ばすことに専念した。

内村航平の場合：オリンピックの魔物（闇）と対峙し、その闇を抜けて光りに向かった。具体的には“日本のため”という集団意識から脱し、怪我をしたチームメイトである山室光史選手のために頑張るぞ、という意識に変わり、我を超えた。「岸壁の母」の作詞者・藤田まこと氏は言った。「詩は100万人のために書いてもうまくいかない。一人の悩み、悲しみを書いて初めて、100万人が耳を傾けてくれる」と。

さすが英国！

ロンドン五輪の閉会式に、二つの歌が歌われた。一つはジョン・レノンのイマジン。国の代表選手たちがぶつかり合い、メダルの数を競い合う姿に、「国なんか無いんだと想像してごらん...」と、歌としてさりげなくアピールした。

二つめの歌は、ジョージ・マイケルのフリーダム。「ピカピカな外面（金メダルを暗示）に、僕は惑わされたりはしない..」英国のシニカルで深い洞察を感じる。

極めつけは、パラリンピックの扱い方。日本では、オリンピックが終わった1週間後には、メダル選手たちの凱旋パレードが華やかに繰り広げられた。英国では、パラリンピックが全て終了したのちに、両選手たちを祝福するパレードを行うという。さすが英国、おみごと！！

<事例 DVD>

猫ひろし、国籍をカンボジアに変えてまで五輪に出場する是非
ドーピングがダメで、ハイテクシューズ、低酸素トレーニングはいいのか
円谷幸吉の自殺、1972年、第一フェーズに押しつぶされたのか、
映画「サタデーナイトフィーバー」、認められたい

ジャネット・リン、尻もち、笑顔、1972年

ポルトの“我を超える”戦略

内村航平の“我を超える”戦略

石井重行、人生をあきらめかけたとき、答えが夜空かれ降りてきた

秦 由加子、18年間走ったことがなかった。これ金メダルだね！

ロンドン五輪閉会式、John Lennon イマジン、George Michael フリーダム。

